

36

日本専門医機構の活動^{*1}寺本 民生^{*2}

わが国の医師の育成には、医学部教育、医師国家試験、臨床研修が義務付けられ、さらに多くの医師が専門研修を受けて、専門医資格取得を希望しており、その意味では、専門医になり、それを維持することが医師としての一つのゴールである。

本稿では、医師の義務にはなっていないが、専門医取得に至る教育と、その後の生涯教育に基づく更新制度について触れておきたい。

1. 専門医制度のこれまでの経緯

わが国で医師の特定領域における資格制度が発足したのは1962年で、日本麻酔科学会による「日本麻酔科指導医制度」である。その後、日本医学放射線学会、日本脳神経外科学会、日本内科学会、日本外科学会などが続いて「専門医」もしくは「認定医」の認定制度を立ち上げ、現在ではさらに多数（50以上）の専門医が広告されるようになった。

このような状況から、1980年以降、各学会の専門医・認定医認定制度を統一的にするということをも目的に学会主導で協議が開始され、続いて、日本医学会、日本医師会などが協議に加わり、専門医認定制度について議論が重ねられてきた。

一方、厚生労働省では多数の学会専門医を整理して、国民的視野に立った専門医のあり方を検討するということから、「専門医の在り方に関する検討会」（高久史磨座長）を立ち上げ、取りまとめを行うこととなった。2013年、その報告書を取りまとめ、①中立的な第三者機関を設立し、専門医の認定と養成、プログラムの評価・認定を統一的に行う、②基本領域を修得し

たのち、サブスペシャリティ領域（サブスペ領域）の研修に入る2階建てとすること、③「総合診療専門医」を基本領域の専門医の一つとして創設する、④基本的に、第三者機関が認定する専門医を広告可能とする、⑤プロフェッショナルオートノミーを重視すること、などが報告された。

このように、1980年来30年以上の議論の末、「専門医の在り方に関する検討会」の基本的考え方に基づき、2014年に現在の一般社団法人日本専門医機構（以下、専門医機構）が発足した。

2. 専門医機構の使命と理念

上記のように専門医機構は、各領域専門医の統一性・透明性と質の担保を最も重要な使命としている。しかし、一方で、最近の臨床研修修了医師が約8,500～10,000名で、その年代の医師の90%以上が専門研修を専攻する（2018年度から2021年度までで8,400名～9,100名）¹⁾ことを考慮すると、専門医機構としても、地域医療や診療科の偏在を考慮せざるを得ず、質の高い専門医を育成するという基本的使命を両立させることを念頭に、専門医機構としての理念と行動目標を制定した（表1）。

3. 専門医機構による専門医養成プログラム

臨床研修において広い視野で医療の研修を修了してきた医師（専攻医）には、専門性を一歩進めた内科や外科などの基本領域専門医の研修が期待されている。そして、専攻医には効率的で実のある研修を保証するという一方で、専門医機構では「専門医制度整備指針」²⁾を策定し、一定の期間内に一定のカリキュラムを研修する、いわゆる「プログラム制」を推奨している。

ここでいう「プログラム制」とは、その領域の専門医としてのoutcomeを達成する教育法の

^{*1} Japanese Medical Specialty Board

^{*2} Tamio Teramoto 一般社団法人日本専門医機構理事長

表1 専門医機構の理念と行動目標 (H.30年12月)

(基本理念) 一般社団法人日本専門医機構は、国民から信頼される専門的医療に熟練した医師を育成し、日本の医療の向上に貢献することを目指します。 (行動目標) 1. 日本専門医機構は、国民が受診に際しわかりやすい専門医制度をつくります。 2. 日本専門医機構は、専門医を目指す医師が誇りをもって医療に携われる制度を目指します。 3. 日本専門医機構は、国民だれもが、標準的で安心できる医療を受けることができる制度を目指します。
--

一つである。したがって、各研修施設では、そのプログラムに則って専門研修をすることが前提となっている。そこで、各施設から提出された専門研修プログラムを各領域学会で当該専門領域の視点から一次審査を行い、専門医機構が専門医育成という視点で二次審査を行い、当該プログラムを保証している。

また、「プログラム制」では、多様性のある研修を期待するという意味で、基幹施設が中心となって連携施設とともに研修施設群を形成し、専攻医はそれらの各施設をローテートする循環型の研修を求められている。

4. サブスペシャルティ領域(サブスペ領域)専門医

専門医のキャリアパスとして、図1に示すよ

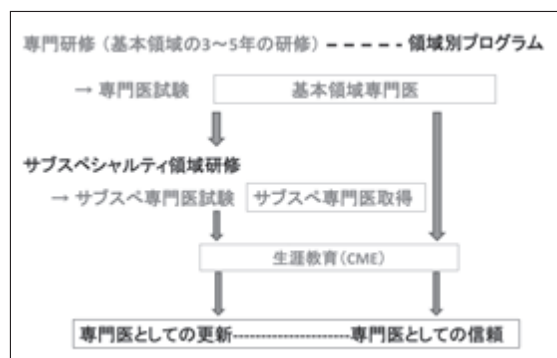


図1 専門研修の位置づけ

うに基本領域専門医を取得したのちに、専攻医の一部はさらに専門化・細分化されたサブスペ領域の専門研修に進むこととされている。専門医機構の使命として、「国民に分かりやすい専門医」という配慮から一定数の重複を避けたサブスペ領域を認定することが求められる。そこで、基本領域が認定したサブスペ領域を専門医機構が審査・認定するというプロセスを取っている。また、基本領域を取得してからサブスペ領域を取得するとなると、約6年間の専門研修の必要が生じ、専門医として地域で活躍する医師が輩出されるのにそれなりの期間を要する。特に、地域医療に要請度の高い領域の専門医についてはできるだけ速やかに専門医を輩出することが期待されることから、いわゆる「連動研修」という方策がとられることとなった。これは、例えば、内科系では基本領域研修でも、サブスペ関連症例については当該専門医の指導により同等の研修を受けていることから、その症例をサブスペ領域の研修として認定するというものである。このことにより、サブスペ領域研修において一定期間の短縮が図れることになる。この連動研修を可能とするため、内科系では「J-OSLER」³⁾、外科系では「NCD」⁴⁾という症例・診療地域登録システムが導入された。しかし、一部のサブスペ領域では、その特殊性のため、ある地域での研修が困難なものもあり、連動研修の段階で地域医療に大きな影響を与えるという懸念が厚生労働省の「医道審議会医師分科会専門研修部会」で指摘された。そこで、厚生労働省において「サブスペシャルティ領域の在り方に関するワーキンググループ」(門田守人座長)が立ち上がり、内科系・外科系・放射線科のサブスペ領域について検討された。2020年3月にその報告書⁵⁾がまとめられ、図2のような形で整理された。

現在、この報告書に則って作成された「サブスペシャルティ領域専門研修細則」に基づいて、今後のサブスペ領域の認定作業に入っている。

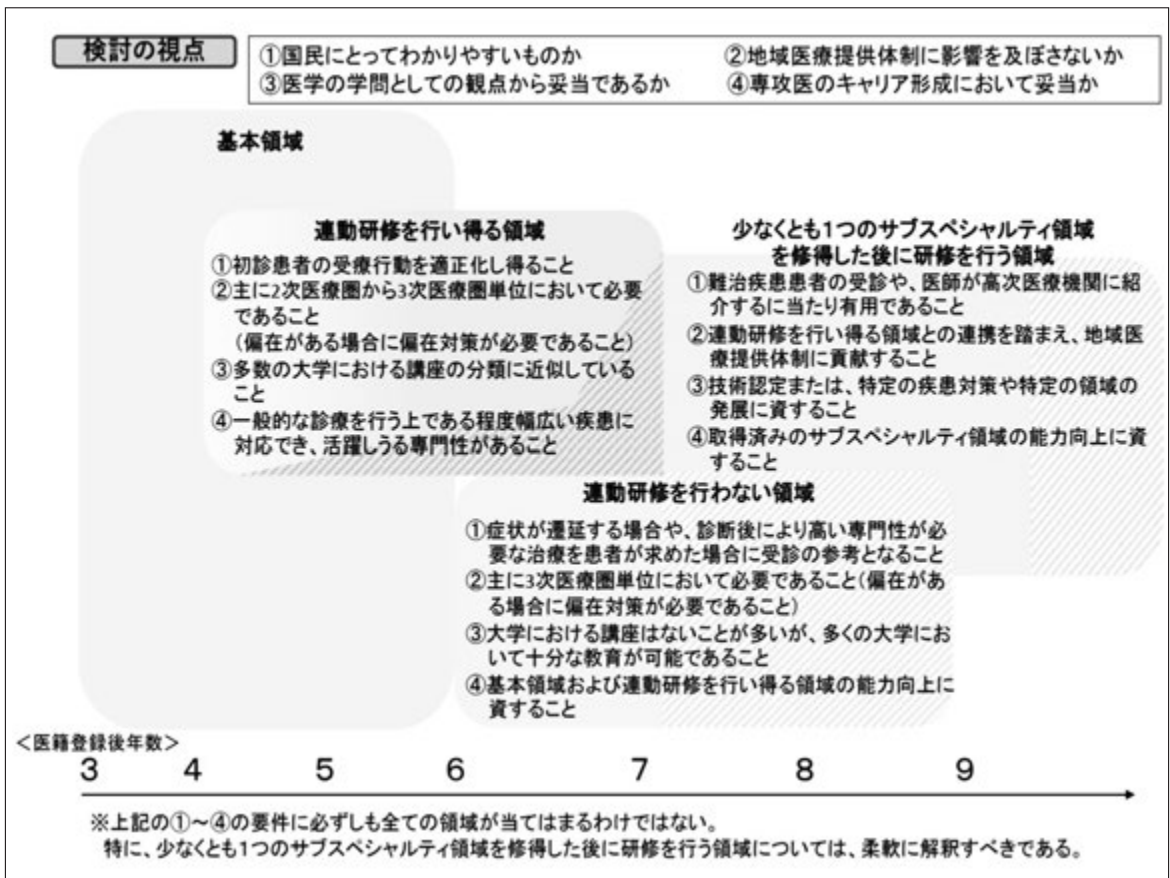


図2 新専門医制度におけるサブスペシャルティ領域の要件

5. 総合診療専門医の課題

専門医機構が立ち上がった時に創設された専門医であるが、他の専門医のような担当領域学会を持たないことから、学会と同様の機能を専門医機構が担当している。

総合診療専門医は、地域医療の研修を中心に、内科、小児科、救急科などの研修を行い、総合的な診療を担う専門医である。臓器別の専門性に偏らない、つまり、あらゆる症状に対して対応できる専門性を育成する上で重要な位置付けになっている。これは、専門性に突き進む医療界において、統合的診療を担う高度な医療技術・知識を身に着けるという意味で、多方面からの注目度も高く、特に、医療提供体制が逼迫している地域医療にかかわっている団体からも期待度が高い。

一方で、総合診療専門医のキャリアパスが見

えないことや、ロールモデルが少ないということなどが原因と思われるが、専攻医としての応募者も2018年から2021年にかけて専攻医全体の2%台にとどまっている。今後、認定試験が行われ、新たな総合診療専門医が生まれることとなり、ロールモデルを示せる専門医が生まれてくるものと期待している。

6. 医師の生涯教育

専門医機構の教育活動の一環として、図1にも示したように生涯教育(CME; Continuing Medical Education)をし、専門医の更新には生涯教育(診療実績とともに共通講習や領域講習)を受けて更新試験に合格することが求められる。

このことにより、わが国の専門医の質の担保が制度化されると思われる。

おわりに

前述のように，臨床研修を修了した医師の大半が専門研修に進むということを考慮すると，専攻医の地域偏在・診療科偏在などの問題も生じ，各方面からの指摘もあり，必ずしも専攻医の望む診療科・施設を選択できない可能性がある．この問題は，専門医の問題であるとともに，わが国の医療体制を考える上でも重要な問題であり，より真摯な議論が望まれる．

■文 献

- 1) 年度採用数 <https://jmsb.or.jp/senkoi/> (最終閲覧日: 2022.4.1)
- 2) 第3版専門医制度整備指針 https://jmsb.or.jp/wp-content/uploads/2020/06/jmsb_mg_ver3_20200630.pdf (最終閲覧日: 2022.4.1)
- 3) J-OSLER <https://www.naika.or.jp/nintei/j-osler/> (最終閲覧日: 2022.4.1)
- 4) NCD <http://www.ncd.or.jp/> (最終閲覧日: 2022.4.1)
- 5) サブスペシャルティ領域のあり方に関するワーキンググループ報告書 https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei_335126.html (最終閲覧日: 2022.4.1)